

令和7年度 大笹生支援学校 地域支援センターささっこ 「高等学校特別支援教育コーディネーター研修会」 報告

令和7年7月16日（木）、大笹生支援学校地域支援センターささっこの主催により、県北教育事務所の金澤克美指導主事、スクールカウンセラーの本多環先生を助言者としてお迎えし、高等学校の先生方を対象とした特別支援教育コーディネーター研修会を開催いたしました。今回は、本校の地域支援センターささっこが対応した高等学校からの相談について、特別支援教育コーディネーターより「“できない”の奥にある“思い”に寄り添う～冰山モデルで考える高校生Aさんの支援について～」と題した事例紹介を行いました。

Aさんは入学当初、大学進学を希望していましたが、障がいの影響や家庭の意向から就職希望へと進路を変更しました。本人は「勉強しなくてよくなった」と安堵する一方で、自己決定がなされていないことへの葛藤が支援者の間で共有されました。

協議では、以下のような意見が交わされました。

- ・自己決定には、幼少期からの「自分で決める」経験の積み重ねが重要であること。
- ・自己理解が自己肯定感につながり、進路選択にも良い影響を与えること。
- ・高校生の進路決定には、保護者や教員の導きも必要であること。
- ・支援には家庭状況の把握と、校内外の情報共有が不可欠であること。



また、各校の進路指導の現状についても情報交換が行われました。進学校では就職希望者が少ない傾向にある一方で、支援体制の整備や専門機関との連携の必要性が指摘されました。さらに、「個別の教育支援計画」の中高間での引継ぎについても課題が挙げられました。多くの高校で中学校からの情報が届いておらず、保護者や中学校側の「不利になるのでは」という誤解が障壁となっている現状が共有されました。

金澤克美指導主事からは、高等学校に設置されている「進路アドバイザー」の活用や、「個別の教育支援計画」の積極的な作成・活用について助言をいただきました。また、スクールカウンセラーの本多環先生からは、支援が必要なのはすべての生徒であるという視点や、震災やコロナ禍による影響で育ちに必要な経験が不足している現状についてお話がありました。

今回の協議を通して、生徒一人ひとりの背景や課題に応じた支援の重要性を再確認するとともに、今後の校内支援体制の見直しや中高連携の強化に向けた取り組みを進めてまいりたいと思います。



次回は、11月20日（木）に開催を予定しています。